

# 青嶺

## Seirei

文責 田中泰司

伊万里市立青嶺中学校

### フリー参観週間 絶賛開催中です

シグファイでお知らせしていた通り、今週初めからから二月六日金曜日まで二週間、フリー参観週間として学校を公開しています。

案内にもありましたが、三学期を迎え、成長した普段の生徒たちの姿を、保護者の皆さんに直接見て頂きたいと思っています。

朝の会から授業、給食、昼休み、掃除、帰りの会、部活動まで、いつでも何度でも構いません。中学生として青嶺中学校で生き生きと学び、活動する姿を見たい是非足をお運びください。

中学生といえど思春期真っただ中です。御家庭での会話もなかなか続かないかもしれません。いろいろな話題を投げかけ互いの気持ちを伝え合える対話ができるといいですね。一見そっけない反応でも、内心では結構嬉しいはずだと私は思います！

### 「带状疱疹」のキツさ

先週から右目の下に違和感があり、腫れと少しのかゆみを感じていました。

週末の研修を終えて、月曜日に起きてみると、たれたような箇所が増えており、周囲の勧めに従い、皮膚科で診察を受けると「带状疱疹」でした。

顔の右側の神経に沿って症状が出て、まず赤く腫れ、膿を持ち痛みと痒みが続きます。何度も膿んで、それがかさぶたになると、別の次の箇所が同じようになりまして。笑ったり、食事をしたりする時には症状が出たところの皮膚が突っ張り、痛かったり痒かったりととても辛いです。また痛みにも周期があり、タイミングが読めません。

顔にかさぶたが数か所、まだ腫れているところもあり、異常に気付いた生徒たちからは随分心配してもらいました。免疫が低下しているということで、疲れやストレスが自覚していないうちに蓄積していたようです。

完治までもうしばらくかかりそうですが、なるべく体を休ませ、体力回復に努めます。

### 「思い」を貫く

長野県に生まれ東北大学で地球物理学を学んだ、赤祖父俊一（あかそふしゅんいち）さんは、オーロラに強い関心を抱き研究対象としていました。

インターネット等がない一九五〇年当時は、日本ではほとんど情報が無く、独学に近い形で学んでいました。

ある時、どうしても分からない課題が出てきて、赤祖父さんは途方に暮れていました。彼は悩みに悩んで、当時のオーロラ研究の権威である、アラスカ大学フェアバンクス校の教授に、その課題についての手紙をしたためたそうです。

だいぶ時間がたってからアラスカからの返事が返ってきました。その手紙には一言だけ「その疑問は君自身が解きなさい」と書かれてあり、渡航費として数万ドルの小切手が同封されていたそうです。

それがきっかけとなり、アラスカに渡った赤祖父さんはアラスカ大学でオーロラを研究し、そのうち教授となり、退官するまで五十年に渡り、アラスカに留まりました。そして国籍をアメリカに移し、アラスカ大学国際北極圏研究センターの所長を務めました。彼が退職する時に

アラスカ大学は、同センタービルを赤祖父俊一ビルと命名し、その功績を永遠に称えています。

純粋な思いや好奇心は人の心を打つし、応援したくなるし、実際に会ってみたくなるものです。

自分の思いを胸にとどめておらずに、当時としては無謀で、可能性がほとんどないとはいえ、直接思いを伝えたことが、人生が動き出すきっかけになったのです。

三年生の国語の教科書に書いてある、写真家の星野道夫さんも、同様で、高校生の時に見たアラスカの一枚の写真に強く惹かれました。そして、その村の村長につたない英語の手紙を書きます。仕事をするから滞在させてくれる家を紹介してほしいと訴えたことからアラスカへ渡ることになります。

それぞれの人生が動き出すきっかけは様々ですが、強い「思い」があり、実現させたいという願いがあれば道は開けると思います。様々な出会いと別れ道、判断の積み重ねが自分の今の人生での立ち位置です。自分の人生をかける対象に出会えた人は、ある意味幸福なのかもしれないですし、そうでない人は、これからは「探し続ける旅」を楽しむ幸福があるかもしれないかもしれません。

いづれにしても、伝えたいことは自分の人生において判断し、行動する責任は自分自身に帰すると、いう当たり前のことです。これから

らの未来を、自分の心に問いながら自分自身で道筋を決め、そして自分の意思で豊かな充実した人生を歩いてほしいと心から願っています。

### 校長室より

今朝、挨拶に立っていると冷たい空気に一段と冬の寒さを感じました。その中にあっても、太陽が昇る位置が徐々に東寄りになり、日差しの暖かさから季節の移り変わりを実感しました。

早いもので、今日で一月が終わります。三年生が学校にいるのは一か月余りとなりました。

名目上は三月三十一日まで在籍しますが、実際は六日の卒業式で終わりにいたします。

義務教育九年間はどんな毎日だったでしょうか？良いこともそうでないこともあったと思います。成長の糧となるでしょう。故郷を離れる人もいて、卒業を機にそれぞれの選んだ道を歩んで行きます。これからの人生が「末広がり」に幸せで、充実した豊かな時間になってほしいと願うばかりです。

このメンバーで過ごすことができた残り時間を、何気ない会話や関わりをかみしめながら、慈しみながら、出会いに感謝しながら大事に過ごしていきたいとあらためて思います。健康にだけは気を付けて一緒に頑張りましょう。